

第5回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2022年8月25日(木) 19時～21時
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 36名
- ◇内容 単元構想案の相互検討①

【ルーム1】担当：大西浩明

(1) 2つの石碑を題材にした減災教育(小学4年 総合) 栗谷正樹先生

大阪市と堺市にある2つの津波に関わる石碑を取り上げたい

大阪市の石碑「宝永の大地震の時も、小船に避難したために津波で水死した人が多かったと聞いているが、伝え聞く人がほとんどいなかったため、今また多数の犠牲を出してしまった。ここに記録しておくので、心ある人は碑文が読みやすいように時々墨を入れて、伝えていってほしい。」

今も地藏盆のときに毎年墨入れをしている

発表活動をどういうものにしたらいいか悩んでいる

<話し合い>

- ・発表は双方向のものがいいだろう → 高潮センターの方や地域の大人を対象に
- ・国語の教材に「調べたことを伝えよう」というがあるので、国語科とのコラボも考えられる
- ・防災よりも地域に伝わる伝統文化財としての教材の魅力を感じた
- ・最近で言えば、関空の高潮による被害などを取り上げたら分かりやすいかも
- ・墨入れを毎年している意味をしっかりと考えさせたい

(2) Is Palm Oil Really an Eco-friendly Product? (高校3年 英語)

谷垣徹先生：奈良県立青翔中学校・高等学校

コミュニケーション英語として10時間で行う

パーム油の生産のため熱帯雨林が減少し、それによりオラウータンの住処がなくなり絶滅の危機

パーム油は環境にいいものとされ、様々な製品に使われている

現地の人たちの大切な収入源となっている

→ 本当に環境にいいものなのか?

地元の人々の収入を維持しつつ、どのように環境を守ることができるのだろうか?

深く考えさせたいが、どこまで英語でコミュニケーションできるか

<話し合い>

- ・作者の別の文章を読んだり、同じ題材を扱っているものを読んだりすることで考えは深まるのでは
- ・英語の4技能(読む・聞く・書く・話す)を一体的にさせたい
- 環境保護派と経済推進派に分かれて自分たちの主張をグループで考えさせても
動画などを探して自分たちの意見の補強をさせてみるのもどうか

(3) 片西マイスターになろう(小学3年 総合) 中澤哲也先生：大和郡山市立片桐西小学校

エネルギーにあふれている子どもが多い → 「〇〇するな」という指導が多い。

子どもの方を見て授業をしているのかと疑問に思うことが多い
もっと子ども自らが生き生きと学べる機会をつくりたいと思っている
金魚を題材にして様々な取組ができると考えている
町の中に様々な金魚の看板などをきっかけにして

<話し合い>

- ・そういうエネルギーにあふれた子どもこそ、ESD では力を発揮するもの
- ・金魚もいいが、それをつきぬけて地域課題を見つけることが大事
- ・平気でごみを捨てる子どもだからこそ、「ごみ」にこだわってみては？
ごみを拾っている大人の姿から何か感じるはず。

【ルーム2】担当：中澤静男

(1) 地域の安全を守るのは私たちだ (中1 総合) 井阪愛子先生：平群町立平群中学校
住んでいるグループで分かれ、町にある防災関連グッズを調査する。(夏休みの宿題)

防災支援マップの完成 (マップに調べたものを貼る)

災害発生や中学生の活動の動画視聴 → 自分たちの町は大丈夫か、自分たちに何かできないか
町の防災課の方を GT として招き、避難所に必要なものを教えてもらう → 学校の施設を点検

人：多くのボランティアが必要 自分たちから動き出そう

物：最低限の物資しかない 持ち寄ろう、寄付で用意しよう

設備：今のままでいいのかな？

訓練：訓練の大切さを感じる

中心発問：絶対に必要なものがそろったら、大丈夫なの？ 本当に大事なものってなんだろう？

物だけじゃなく、私たちの意識こそ (自分事) が重要。

地元の方に守られているという実感を持っている。でも今度は私たちなんだ。

守られる人から守る人に！

→ 防災支援マップのバージョンアップ

<話し合い>

- ・既存の防災マップをたたき台にすると取組やすい。
- ・「守られる人から守る人へ」がすばらしい。保護者へのインタビュー (巻き込み) もして見ては。
- ・これまでの災害について聞いてみてもよいのでは。
- ・脱炭素社会に向けたライフスタイルの変革に発展するのも大切。
- ・自助・公助・共助 の観点から大事な学習だ。
- ・最近の災害のビデオを見せてはどうか？ 印象が強すぎるような気がする。

(2) 「をばすて 『大和物語』より」 (高校1年 国語) 神林真理子先生：白梅学園高等学校
古典作品から現代の問題につなげる

・高齢者問題 (高齢社会の現実を把握し、考察する)

→ 社会保障制度の崩壊へ

→ 幸せに生きていくことができる社会の実現への取組：テクノロジーに着目

・ジェンダー (女性に押し付けられた役割) (日本のジェンダー問題の現実を把握)

→ 就学率が高いが経済的に低い。離職率も高い。

→ 海外の取組と日本の比較 ルワンダ、北欧

あなたが今後取り組めることは？ 政治的な活動にもつなげる、企業や町内会活動につながる。

<話し合い>

- ・自分が「捨てられる」ことを想定する。
- ・生徒が考えたことを現実の当事者に投げかけてみてはどうか。
- ・古文の読解から現実問題につなげるのは、生徒の学習意欲につながる。
- ・自分のライフステージ、未来設計図と重ね合わせることで自分事化できる。

(3) 閉じ込めた空気や水 (小学4年 理科) 石田あき先生：菊池市立花房小学校

空気や水を閉じ込めてみよう

それを押したらどうなるだろう。

縮むと押し返す力になる 手ごたえの可視化

ペットボトルロケット

<話し合い>

- ・普段は気にしていない空気や水を取り上げることで、探究する心を養いたい
なぜ、そうなるのか？ こうしたらどうなるのか？
- ・見えない空気を扱うことの難しさ。初めにペットボトルロケットを見せて、その理由を探究させると継続する。

【ルーム3】担当：加藤久雄

(1) 「醍醐地区の魅力を見つけよう～春の学校～」(小学6年 特別活動)

小関直幸先生：山形県寒河江市立醍醐小学校

- ・ビンゴカードを6年生がつくって、下級生とともに「春の学校」に出かける。
- ・6年生にとっての学びはあるが、下級生の学びは？
→低学年児童に絵を描いてもらって、上級生に評価してもらったり、地域の人々に評価してもらう。
- ・よりよい「ひろげる」学習は？ (行動化、学習の成果をどうつなげていけばよいか?)

<話し合い>

- ・お地蔵さんの意味、いわれ
- ・子どもたちの地域のお地蔵さんに対する意識は低いのか？ 子どもたちの変容は？
→お地蔵さんに対する関心は低いので、ビンゴカードを使って探すことを通して、関心が高まった。
日記などで子どもの変容をうかがい知れる記述がみられるように。
知ることをきっかけに、次につながることもある。
- ・のちのちに繋がっていくことがいいなあと思った。
- ・ビンゴカードを通して、見方を下級生に与えている。
→ビンゴカードの文言に、クリティカルシンキングの視点が入っている。
- ・小学校での活動をベースに、中学校で掘り下げられることもできると思う。
- ・いろんなものがあることを実感できる実践だと思った。(そこにあることを知る体験)
- ・魅力あるもの、価値あるものということを認識できる。下級生のときに気付けなくても、学年を重ねるなかで、積みあがっていけばよいと思う。

→小6での醍醐寺子どもガイドを実践するためには、それまでの地道な積み上げが必要と改めて気付いた。

(2) 地域調査の手法 学校行事で訪れる三重県を例に (中学2年) 中村基一先生：附属中学校

- ・海のコンディションが良い時の海苔と、悪い時の海苔の味くらべ
- ・三重県(鳥羽市)の漁業がこれからも続けていくのに必要な事はなんだろう?
- ・海苔がとれなくなっている。(温暖化、貧栄養化が起きている。)
- ・事業が成り立つ値段。しかし、買ってもらえない。というギャップ。(安ければよいという価値観)
- ・モノに対して、安く買えることがいいという価値観があふれている現在社会。
適正な価格でモノを買うという価値観は薄いのではないか。
- ・お金だけでない部分に、価値を見出させたい。
- ・モヤモヤしていること・・・個人の行動化の次に、第三者にひろげていくことが難しい。(ふわっとしている。)

<話し合い>

- ・子どもたちが「ああだよ。こうだよ。」と言っていたことを、考え直すポイントがあるか。
- ・「安ければいいという価値観」を考え直す。ということが含まれている価値ある実践。
→安さを求めている消費者の存在。
- ・内陸部の子どもたちは、漁業を身近に感じるのが難しい。水産業に関わる人の話などに触れさず、ホンモノに触れさせることが大きいと感じた。
- ・ゲストティーチャーの活用(オンライン)・・・ゲストティーチャーに序盤に出てもらって、課題提示(宿題を出してもら)。自分たちで課題解決に向けて考えることで、他者にひろげる目的となるのではないか。
- ・三方よしの活用・・・買い手、売り手、市場(消費者)の3つともに加えて、環境のことも考えることができる学習が深まるのではないか。
自分たちの幸せだけでなく、まわりの幸せも考える。
→四方よし「未来もよし」であればいい。
- ・「乗りの味比べ」という実体験・経験のインパクト。
- ・貧栄養化の原因として、海がきれいになりすぎていないか?
→海苔を養殖するために、土を掘り返すこともしている。これが環境に良いことなのかという疑問。

(3) 「平和」とは何か 児童一人一人が考える学びの実践(小学6年)

阿部大輔先生：山形市立千歳小学校

- ・広島市の小学生との交流、広島の平和学習を通して、山形の平和について学ぶ。
- ・ユニセフ(山形市出身の大学生)との交流・・・世界の子どもたちについての理解 わたしたちができることは？」
- ・地域の「千歳遺族会」の方との交流
- ・学んだことを地域のコミュニティセンターなどで発表してほしい。地域とのつながり。
- ・着地点・・・今の生活が当たり前ではない。家族への感謝、友達を大切にするなどにつなげたい。

<話し合い>

- ・つながろうとする行動力がすごい。
- ・広島とつながるときに、広島の大人でなく広島の小学生（同世代）から学ぶということがポイント。
- ・下級生へつなげることもすればいいのではないか。
- ・他地域とのつながりから、自分たちのことを見つめ直している。
- ・ゲストティーチャーが、なぜ、その活動をするようになったかを子どもたちに考えさせればよいのでは。
- ・広島の同世代の小学生との交流を通して、山形の子どもたちが発言できなかった。その経験が子どもたちを変えるきっかけになったのではないか。
- ・SDGsの17の目標には「核兵器」が入っていないことに違和感をいただいている。
- ・着地点に注目。あるもの、いいものに気付かせたい。心の平和が、行動の変容に関係していく。
- ・自分たちの「心の平和」をゲストティーチャーに宣言として返すことで、責任感も生まれるのではないだろうか。

【ルーム4】担当：河野晋也

(1)「ハザードマップを地域住民に説明するための授業」(高校科学)

佐藤崇之先生：山形県立高畠高等学校

『科学と人間生活』(必修週2コマ)

山形県内にある火山(鳥海山)を題材として取り上げ、どのような備えが必要なのかを考える。その付近にある遊佐町で地域住民に配布しているハザードマップについて、地域住民に説明するためのプレゼンテーションを作成する。作成したプレゼンテーションは遊佐町の役場職員にプレゼンして評価してもらう。

<話し合い>

- ・火山の近くに住むことの良さと課題,両方から捉えさせようとしている。どのような良さがあるのか。
→温泉が湧き観光資源となる。また火砕流の跡がきれいな景観を作る(大分では地熱発電も日本一です)。人によって見えてくるポイントが変わるだろう。様々な視点から、多面的に火山を捉えることが望ましい。
- ・遊佐町には少年議会があり、高校生同士で係わりを作っていくのもいいのではないか。
- ・『科学と人間生活』という教科の特性をうまく生かせるとよいと思った。総合的な探究としてではなく、科学的な視点を重視した探究ができれば。
- ・提言を遊佐町(生徒たちが通う高校とは距離がある)に提言するというのが、うまくいくだろうか。他地域の者が地元で提言するということになるので、十分注意して行わないと「よそのもの」扱いされる可能性がある。生徒たちにとっても自分事になるよう、働きかけが必要だと思う。

(2)「災害に強いまちづくり」(小学6年 総合) 梁川千尋先生：奈良市立伏見小学校

修学旅行(北淡震災記念館など)の経験を踏まえ、大きな災害が起きた際に、自分たちに何ができるかを考える単元。特に災害時に小中学生が頼みとなる避難所設営・運営に着目し、どのようなことが必要かを考え、今できることを実践していく。

<話し合い>

- ・実際に南海トラフ地震が起きた際に、奈良の伏見小学校でどのような被害が想定されるのか
→津波の心配はないだろうが、交通網が遮断される可能性はある。他府県から避難してくる人も多く

いるかもしれない。または土砂崩れなど。どんなリスクがあるのか、明確にしておいた方が、避難所運営を考える際に焦点化できるし、子どもたちにとっても自分事になりやすいだろう。

- ・ 竈門ベンチってどんなの？
- ・ 切実感をどうつくるか。「みつめる」段階ですでに「自分たちに何ができるか」という問いを子どもたちが持つだろうか。もしかしたらもう少し後なのではないか。
 - まずは大人たちがやっていること、防災倉庫などをしっかり知って行って、そこから課題意識が出てくると言い。日のおこしかたやロープのむすびかたも学んでいいと思うけれど、「なぜロープの結び方を知らなきゃいけないのか」「本当にちょうちょ結びでは困るのか」という切実感がないと、学びにくい。
 - 一方で、消防団の人の、阪神大震災の時のお話は、子どもたちにも強く心に残る話だった。これを阪神地域の話ではなく、自分たちにも関わる話だと考えることができれば、強く切実感をもたせることができそう。

(3)「ちち牛を育てる植村さんのしごと」(小学2年 生活科) 入澤佳奈先生：附属小学校

牛乳がどのようにできるのか知らない子が多い。実際に植村牧場について、乳牛から乳をとって牛乳として製品化されるまでの過程を学ぶ。その中で、大手の牛乳とはまた違う、植村牧場の牛乳の魅力に気付いたり、牛にとっても負担のない製造などのこだわりが気づかせる。

<話し合い>

- ・ 大手の牛乳は「その味」をつくるために決まったエサをあげているが、本当はエサが変われば味が変わるということを初めて知った。今は付属小の給食で植村牧場の牛乳が飲めない聞いて残念。もし子どもたちが毎日飲んでいたら、実践で気づくことももっと深まっていたと思う。
- ・ なぜ植村牧場ではえさが毎日変わるのか。
 - 牛のえさは一般的な牧場が専用の配合飼料を使う。与える時間と場所とえさを中身を同じにすることでブランドを作っている(いつも同じ味の乳が出る)。一方植村牧場ではビールかすや脱脂粉乳の他、地元の農家からもらった作物なども混ぜている。その日の牛の体調を見て、牛にとって最も良いエサとなるよう変えている。
- ・ どのように ESD の授業を構想していくのか
 - 子どもたちが見えているところ、見えていないところを教師が見極めることだと思う。見えていないところに授業づくりのヒントがあると思う。